

浄土

1987-11

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 (運輸省 特別授承認雜誌) 第三二五号
昭和六十二年十月二十五日印刷 昭和六十二年十一月一日発行
第五十三卷 十一月号





十一月の秀句

秋晴の空果てもなし月を見出づ

原田 種茅

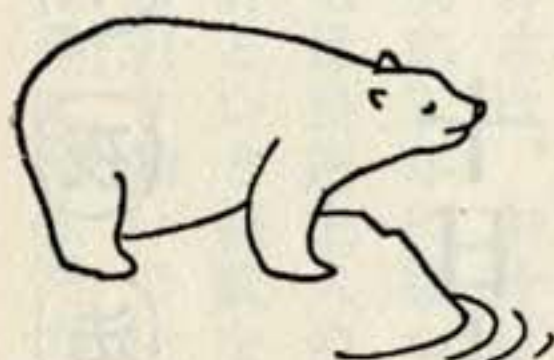
豊年のいまくきやかに入日空

永尾 宋斤

女湯もひとりの音の山の秋

皆吉 爽雨

十一月号



かの仏の国土には、常に天樂を作す。黄金を地とせり。昼夜六時に、曼陀羅華を雨らす。

——『阿弥陀経』

目次

法話

十日十夜別時念仏について(下)……………宮 沢 善 弘……(2)

良寛雑記(一)……………江 目 達 雄……(8)

=江戸物語=(10)

江戸の祭り……………細 田 隆 善……(14)

《読者のページ》

「信」の不足による——……………吉 田 勇之助……(26)

(木)(下)(隆)(一)(随)(筆)(集) <8>

海と山の狭間で

——男のロマン(2)——

……………木 下 隆 一 ……(28)

◇◇長篇連載小説◇◇

立ち止まるな善導 第41回

不老不死

……………寺 内 大 吉……(35)

挿絵 松濤 達文

表紙絵「みずひき」 松浦春子画

(お) (十) (夜) (法) (話) [下]

十日十夜別時念仏について



宮^{みや} 沢^{ざわ} 善^{ぜん} 弘^{こう}

(横須賀市正観寺住職)

朝一番のテレビを見ると、瀬戸内海の風物が写されていました。海の銀座の名に相応しく、渡航船舶のラッシュです。変りゆく沿岸、四国に繋ぐ巨大な橋梁等が続いて、これは対

照的な昔からの伝統漁法・鰯^{ほら}の地引網漁がユ―モラスに紹介されました。「このように瀬戸内海には、伝統と変化が共存しています」とはアナウンサーのことばでした。

お十夜のお話の結論にしたいと思うことは、丁度これに似ています。一方では五百年に及ぶ伝統の形式美、他方には厳しい反省を通して模索する新しい在り方、つまり二十一世紀への懸橋かけはしであります。

ところで、お十夜のことを易しく述べをものに、通俗十夜法要略縁起りやくえんぎがあります。原著者源譽正空げんよしょうくうという方はご自身の師であり光明寺では先代（八代または九代）の祐崇上人、が天皇から十夜法要の永代勅許を賜わったことを、誇らしく感激の筆致で書き認めたものであります。

因みにこの本は、お十夜について述べた最古のもので明応五年に書かれました。後に目黒祐天寺十七世良阿上入の更なほしたたりたしたり補あきらかにがありました。が、勅許という權威を顕彰するという主旨は原本から引き継いでいると思います。

「夫れ以れば爰こゝに念仏門の法軌きまりとして年毎としごとに

十日十夜じゅうにちじゅうやと号なづけて別時の念仏を執行とりおこなうことあり……」は、冒頭の文章がありますが、当初から、お十夜は別事の念仏が標榜かんぱんであったということに改めて注目しましょう。

この本は、浄土宗におけるお十夜の参考書のように扱われて来ましたので、あらゆる所に引用されました。

私達がお説教をする場合にも当然のことと、これによって一と通り由来いわれを話し、それから浄土宗のお念仏のお話をする。これが常道で、ずうっと昔から、矛盾などはなく、皆がそうして来たようであります。

かつて、十五、六年前になりましたが、私は招かれて若い人達（学校教師が主なメンバー）のサークルで、文化についての座談会に参加したことがありました。

私は今、そこでの衝撃的な体験を思い出しています、

どういふ切っ掛けからか、「先生、お十夜というのば十五夜と関係があるのですか」という質問が出ました。

私は得々として、慈覚大師円仁えんにんの入唐求法巡礼行記じゆんれいぎから始め、真如堂しんにやうどうの靈像ほんぞん、平貞国たいちのさだくにと十日十夜の起り、祐崇上人が勅許を受けた経緯きつと現在の光明寺の盛儀などを話しましたところ、まさに、青天のへきれきとも思えることばが返って来たのであります。

一つは「法要というのは天皇の許可を必要としたのですか」であり、二つ目は「もし二人の人が互いに憎しみ台って、あちらの寺こちらの寺の仏さまに願を掛けたとします。どちらの阿米ダさまが相手を不幸にしてくれるのですか」と女性らしい質問でした。次に「どうしてこの世界の十日と天国（彼はそう言

いましたか）の千日などといと比較が出来るのですか」でありました。

これは質問の要点です。一見幼稚に見えますが、尋ねているのは知性溢れる連中です。前号で挙げた二つのポイントは、実はここに原点があるのであります。

元祖法然さまは往生記おうじょうきという撰書せんしよの中で、難遂往生機なんすいおうじょうきといって、人の機根きこんで極楽往生が出来そうにないのを十三通りに分類して挙げております。その中の八、九、十を見ますと、これはまさしく現代の若若の属性しゆしやうそのものに通じるのであります。

八には、常に疑煩悩ぎぼんのうを生ずる人。
九には、好んで雑縁ざうえんに近づく人。
十には、縦い理たとを得ると雖も、偏執改め難へんしやくあらたき人。

右のような人達をこそ対称あいてにして、浄土往生じょうとうおんじやうの願・行ねがひとねんぎやうを勧めるのが今日の、いやこれからの布教であり、真剣勝負の法談であろうと思います。集団おほぞいと対しても、相手は一人ひとりということなのであります。

現代の（学校）教育では、万人に人格形成の過程で、右の性質の全部を、学習の名の下で、身につけさせようと努めます。科学・技術の重視、個性を尊重する教育では、事物や現象に対して疑いを持つことは必要な徳性として評価されます。重要な発見や学問的成果の裏では、無数の試行錯誤しこうさくご（雑縁ぞうえんに近づくこと）はむしろ心要なのであります。自由主義、個人主義、また、民主主義にあつては、第十に属する人は人間の欲望との関わりにおいて殆んど無限に居り、それを解放とさえ味ぶのです。

元祖さまがかかる分類を私達に示されたの

は、人間に対する大きな警告であつたばかりでなく、そういう人間根性でさえも念仏を申さば往生を得、と、確約されているその先見（小消息）には驚くばかりであります。

私は、若い知性のその疑問と真向まっこうから対峙たいじした時、これまでにしてきたお十夜の話に大きな空洞ができ、その価値が急速に消失するような思いがしました。

今、私は、大きな決断を迫られ、その瀬戸際にいると思いました。それ迄の感覚ではなく、新しい感覚をもつてする構想の立て直しという、勇気のいる選択を突きつけられたのだと思いました。

これもテレビでのお話はなりますが、八月の始め、NHKで『戦争を知っていますか』というシリーズが放送されました。大切な体

験放送です。子供達に伝える、という副題も付いていました。所が、同時刻の他の番組はNHKの教育でさえそうでしたが、他局はすべて、関係のない芸能番組ばかりでした。戦争反対など軽々しく言うのを聞きますが、戦争を知る人の体験を自らの体験の代理として受け止め、絶対体験^{かけがいのないたいけん}として骨身に染め込ませた者が本当の戦争反対者になれると、戦争体験者である私は思います。

宗教体験もこれに相通じるものがあります。釈尊のお悟り、元祖さまの念仏安心^{あんじん}、これらは共に個人的体験ではあっても、拝する私から見れば冒すべからざる絶対なるものであります。だから私はそれへの帰入^{いつたいになること}を求め、万人もそのことを願うのであります。似て非なるものは或る者には絶対と見えても、他の者からは困るというような場合です。自分の願いが叶って喜ぶ時、その蔭で泣く人がいた等

はあまりに明らかな例といえましょう。

浄土宗の阿弥陀如来は、どちらのお寺の本尊様でも皆一つであり、お仏像が異なることによつて如来の法体^{もとのすがた}に違いが生ずることはありません。

差があるとするのは、現世利益^{げんぜりやく}ということでありますから、お十夜を勤める時、本尊様に対してそういう霊像視^{れいざうし}を決してしてはならないのであります。

次に、お十夜は勅許の法要であるといと權威意識^{いゐいしき}から脱脚しなければなりません。權威意識は元祖さまの浄土宗を漬^{どく}するばかりでなく、それからの脱脚は、将来、サバイバル^{いさゐのこり}の爲には必須条件となりましょう。

祐崇上人が賜わった勅許の内容を、略縁起は「引声^{いんしやう}の誦經^{そきやう}念仏^{ねんぶつ}并に十夜の法事^{ほふじ}。永く浄土宗の法軌^{ほふしき}たるべき旨の勅許^{おゆるし}」と述べています。これは、上人が後土御門天皇に請願した

内容を現わしている文章と殆んど全部同じで、極めて微妙な言い回しであります。今私なりに現代的な感覚で注釈するならば、上人が「并に」と上下に分けられたのは、上は真如堂縁りの引声阿弥陀經と引声念仏という古今稀れなる法要形式の導入を意味し、下はお十夜を浄土宗らしく別時念仏会として実態を定め、将来に発展の余地と可能性を残そうという深慮であつた、と了解するのです。そうでなければ浄土宗の自主性はまったくなく、別時の念仏であるならばそれこそ元祖さまのお示しに従うことです。

伝統的な美の形式は本山法要で伝承し、信心の徒を魅了する立派な演出で修すれば、その価値はまた格別であります。しかし一般寺院では十日十夜別時念仏会とはつきり銘打つて実質的に修行する。その中に現代的な工夫と実践の変化を導入し、念仏専修を幫助する

のです。

次に、前号の初めに讃題の例文で挙げた經文のことでありますが、これは無量壽經卷下の文で、梵文（印度の原語）經典では欠けでいる部分といわれますが、古来お十夜の説明によく引用されて来た文であります。しかし今日の若い人たちにはむしろ真意は誤解されてしまふのです。十日十夜思想は古くから浄土教に伝わるもので、十日十夜念仏すれば必ず仏を見る（鼓音声經）とか、腹を立てず身を清浄にして一心不断十日昼夜念仏すれば命終の時必ず往生す（大阿弥陀經）等は支えとして、ひたすら一念十念、一日三日七日、十日十夜の別時念仏を修するべきでしょう。お十夜をわがものとしたとき、これは往生の願行に資する最大の価値をもつでしょう。

（了）

良寛雑記 (一)



江^{こう}目^{のめ}達^{たつ}雄^{ゆう}

(山形市迎接寺住職)

良寛というと、手まりをついたりかくれんぼをしたりして、一日中、子供たちと遊びたわむれた、子供好きの坊さんを思い浮べるかもしれない。

良寛は、手まりには格別の愛着をもっていたようである。手まりを題材にした詩や短歌を、いく篇も書いている。

霞立つながき春日を子供らと 手毬つきつつこの日暮しつ

この里に手まりつきつつ子供らと 遊ぶ春日は暮れずともよし

長い雪国の冬が終り、春の日ながに手まりつきなどをしながら、子供たちと遊びたわむれる、こん

な春の日よ、いつまでも暮れないでくれ、とうたっている。

良寛にとって、子供らとの無心の遊びは、無垢な童心への回帰であった。そんな良寛を、子供たちは仲間に誘いこみ、良寛もその遊びの輪に加わっていった。

良寛には、沢山の逸話が残っている。

有名な話では、筍が便所の床からのびてきて、屋根につかえそうになった。筍がかわいそうだというので、ローソクの火で屋根に穴をあけようとしたところ、便所が丸焼けになってしまったという話。

草庵にお客さんが来ると、タライがないので、味噌すりなどに使っている播鉢にすすぎの水を汲み、足を洗わせたという話。

一見、奇行と思えるこんな行為も、天衣無縫の良寛にとっては、なんのてらいもない、ごく自然な所作だったのではないだろうか。

良寛は、道元に参じる曹洞禅の僧である。

春の深夜、草庵のうすぐらい灯火のもとで、道元の永平録を読み、感動のあまり滂沱と涙を流し、書物を湿めらしてしまふ。

その良寛に「僧伽」という長編詩がある。試みにこの詩の次の一筋を、読むだけでよい。きびしい叱咤の声を耳にし、凜冽孤高の禅僧の姿を、見出すであらう。

我出家の児を見るに、昼夜浪に喚呼す。祇口腹の為の故に、一生外辺に驚す。白衣の道心無きは、猶尚是れ恕すべきも、出家の道心無きは、其の汚れたるを如何にせん。

(柳田聖山訳「良寛道人遺稿」による)

良寛に、馬之助という甥がいた。良寛の生家橘屋をついだ弟由之の長男である。この馬之助は大変な放蕩息子で、日夜、料亭などに遊び呆うけていた。母のやす子は心配のあまり、良寛に意見してくれるよう頼んだ。

良寛は生家にやってきて、馬之助と顔を合わせるが、ひとことも何も言わない。こうして三晩がすぎってしまった。

四日目の朝、良寛は山に帰ると言い出し、玄関で草鞋をはきかけていたが、馬之助にひもを結んでくれと頼んだ。馬之助はいいつけに従いひもを結んでいると、襟元に冷いものを感じた。思わず見上げると、良寛の目に涙が光っている。それから、馬之助の放蕩はびたりとやんだ。

人に訓戒することは、難しい。言葉は、ときに反撥や対立を招きかねない。

良寛の無言の慈愛の涙が、ことばや、はからいをこえて、甥の心をうったのである。

○

良寛は越後の出雲崎で、橘屋山本家の長男として生れた。父は山本以南、母は秀子、良寛の幼名は

栄蔵と言った。生れた年は、晩年の法弟貞心尼の「蓮の露」に、「天保二卯年正日六日遷化よはひ七十四」とあることなどから逆算して宝暦八年とされている。

山本家は代々の名主で、石井神社の神職も兼ねる家柄であつたが、隣村尼瀬の京屋との勢力争いがつづき、以南の代あたりから家運は傾きかけていた。

良寛は十二歳のころ、地藏堂町の大森子陽の狭川塾に入り、五、六年間、漢籍を学んだ。師の子陽は、若くして江戸に遊学し、北越四大儒の一人に数えられていた。良寛の漢学や漢詩の素養は、この子陽のもとで基礎がおかれたのであろう。子陽は、良寛が狭川塾を去つた四年ほど後、居を庄内鶴岡に移し、当地の藩士の子弟たちに漢学を教えていたが、寛政三年、その地で五十四歳で没している。

良寛は、十六歳になって元服し、名主見習の役職についた。ところがその二年後の十八歳のとき、突然、尼瀬の曹洞宗光照寺玄乗破了のもとに身を託し、仏門に入った。

良寛がなぜ出家したか。突然の出家の動機について、いろいろな理由が推測されているが、確かなことはもとより明らかではない。

ただ、光照寺に身を寄せた良寛は、ただちに剃髪したのではなく、いわば居士の身分で仏道修行に参じていたのではないか、ともみられている。

良寛の出家の決意を確かなものにしたのは、安永八年二十二歳のときのことである、この年、備中玉島円通寺の大忍国仙和尚が、越後巡錫の途次、光照寺に止錫して授戒会の戒師を勤めた、良寛は、国仙の声咳に接するや、直ちにその道風を慕って剃髪受具し、大愚良寛と名を改めたのである。

良寛は、師の国仙に随つて玉島円通寺に入つた、円通寺の禅風は、きびしかった。僧堂の生活を偲

ぶいく篇かの詩がある。次もその一つ。

円通寺に來つて従り、幾国か冬春を経たる。門前、千家の邑、乃し一人を識らず。衣垢づけば、手自から濯い、食尽くれば、城闕を出ず。曾て高僧伝を読むに、僧は可々に清貧ない。

(柳田聖山訳前掲書による)

良寛は、十年余の修行ののち、即ち寛政二年(一七九〇)、三十三歳にして師国仙の印可を受け、次の一偈を与えられた。

良也如愚道転寛 良や愚の如く 道転寛し

騰々任運得誰看 騰々任運 誰か看るを得ん

為附山形爛藤杖 為に附す 山形爛藤の杖

到处壁間午腫閑 到る処の壁間 午腫閑たり

この一偈を見るとき、国仙の良寛に寄せる期待の大きさを、伺うことができよう。その国仙は、あくる寛政三年、六十九歳を以て示寂した。

○

師国仙の示寂にあうと、良寛は円通寺を離れ、遍歴の旅に出た。

その足跡は、よくわかっていない。中国地方から、四国や九州にも渡ったらしい、それは、短歌の中に唐津の地名がでてくること、江戸の国学者近藤万丈が、弘化二年に著した「寢覚の友」の中に、土佐の城下より三里ばかりはなれた山の麓の、いぶせき庵で、良寛らしい人物と出合ったことが記されていること、などからである。

その遍歴の旅は、前後五カ年に及ぶが、近藤万丈の一文などから察しても、文字どおり草を枕の漂泊の旅であつたと思われる。

良寛が諸国を漂泊しているとき、父の山本以南が、京都の桂川に身を投げて、六十歳の生涯を閉じた。寛政七年七月二十五日のことである。良寛はときに三十八歳であつた。

以南は、北越の俳人として知られていた、名主役を次男の由之に譲り、自らは俳諧風流をこととしていた。ところが寛政七年京に上って、勤皇の志士たちと交りをもつようになり、皇室の式微を嘆いて「天真録」を著し、悲憤のあまり桂川に身を投じたと、いわれているのである。

良寛は、旅のどこかで父の死を聞いたのであろう。京に上って、末弟の香とともに、七七日忌の法要に列した。香はその頃、澹斎と号し、京の文章博士高辻家の儒官として、頭角をあらわしていたのである。

良寛は、父の法要をすますと、香とともに紀州高野山に詣うで、その足で、郷里の越後に向つた。足掛け十七年ぶりの帰郷であつた。

しかし郷里では、母秀子は十二年前の天明二年、四十九歳で没しており、師の大森子陽も、旧友のいく人かも、すでにこの世の人ではなかつた。

(つづく)



江戸物語

(10)

江戸の祭り

細田隆善

(俳号・豊明)

日本人は古来祭礼を大切にし祭り好きの民族であった。神を迎えて五穀豊穰、国家平安などを祈願し、商売繁昌、息災息病などを願い、その間、歌舞音曲、山車行列、神輿渡御の行事を行い、各地によって様々の祭礼行事を行ってきた。江戸っ子はまた大の祭り好きであった。江戸八百八町の各町の祭礼経費の負担は大きかったが、趣向をこらして盛大に祭りを行うことが町の誇りであった。当時神社は別当寺院が多くを管理し、神仏混交

江戸は全国総城下町
江戸は世界一の人口
江戸は日本の縮図
江戸で日本の富の半ばが消費
江戸文化の出現

であり、徳川家康以下歴代の将軍、幕府は祭礼行事を大切にしてきたので、江戸の祭りは天下祭りをはじめ大小

の神社はそれぞれ特色のある祭りを催してきた。江戸の祭りの代表的な数社を尋ねることとする。

山王権現さんおうこんげん

現在の千代田区永田町の日枝神社である。

以前は日吉山王大権現といい、祭神は大山咋神（おおやまくひのかみ）咋は主の意、例祭は六月十五日が大祭、猿が神使であった。江戸氏が武蔵野の開拓神として山王宮を祀り、文明十年（一四七八）太田道灌が鎮護の神社とした。天正十八年（一五九〇）徳川家康が江戸を城下町にし、江戸城内鎮護の神として山王権現を祀りあがめて以来、徳川家代々の産土神とし、さらに市民からは江戸の町の氏神として崇敬されるようになった。山王神仰は京都の比叡山を神とする日吉神社に由来し、日吉、日枝は比叡山の比叡に由来し、山王は山の神の意であり、祭神も山の神の意味である。江戸城の拡張により山王権現は江戸城内から現在の国立劇場のある付近に移転し、さらに明暦の大火後（一六五七）現在地に移転をした。昭和二十年の戦災にあって焼失し、昭和三十三年復興した。寛永十二年（一六三五）三代將軍家光が、山王権現の祭礼行列を江戸城の櫓の上から見物し、以来山王権現の祭礼行列は江戸城内に入ることが通例となった。祭礼には神田

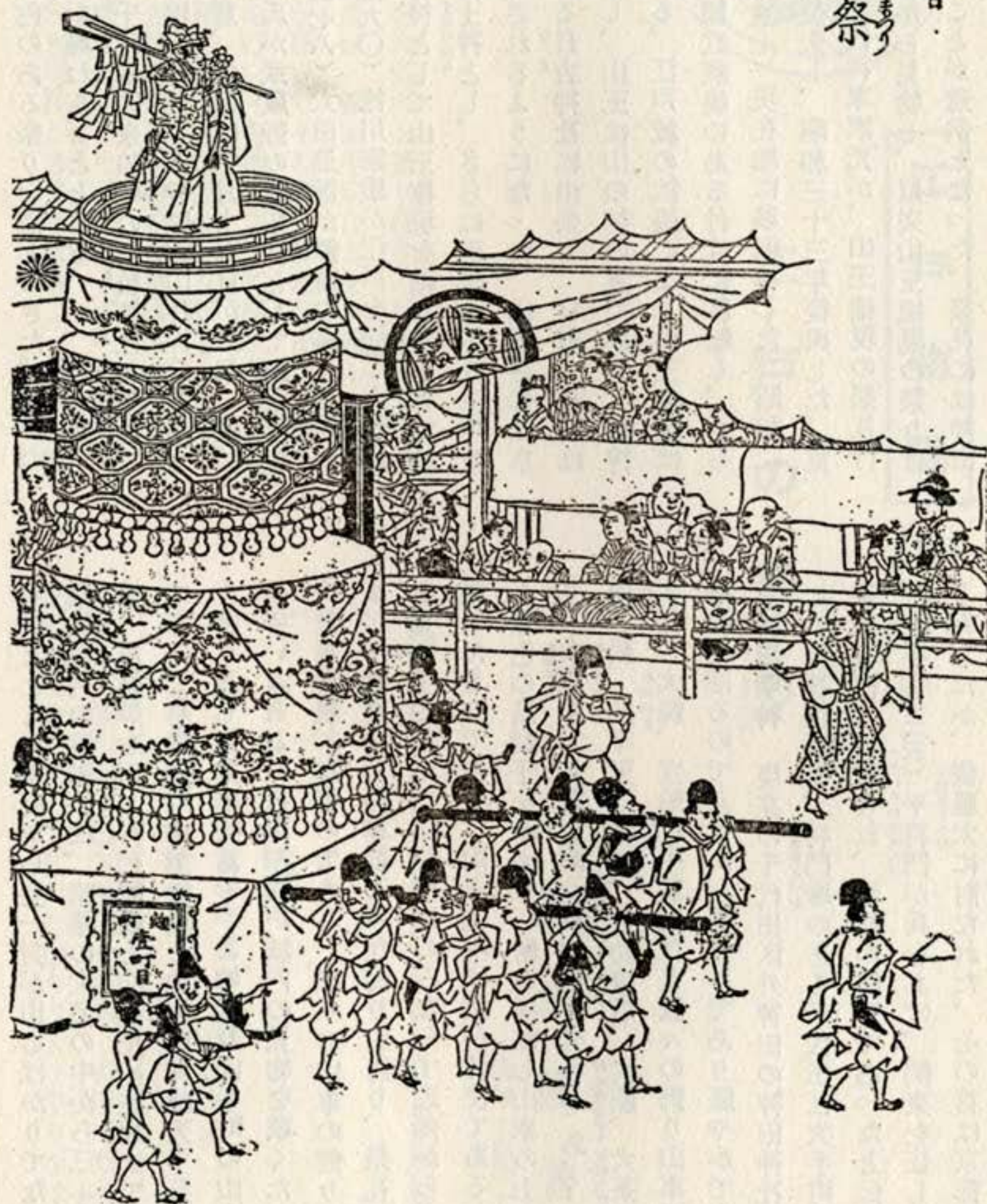
明神とともに幕府から金一封が出るばかりでなく、その祭礼行列の渡御には、諸藩の大名の中から三十三家が槍、足輕等を出し行列警備と交通止め整理まで行ったのである。幕末まで山王権現と神田明神は天下祭りの名称を誇りとしたものである。この祭りは各町の山車の台数の多いことと、將軍や江戸城内の見物を載くために飾りの豪華を競ったものである。祭りの山車の飾りは時代によって異なるが、つぎのような飾りを誇り、祭礼にはこれを見物するため、江戸市民のみならず近郊から人々が群集したものである。山王権現は猿が神使であるから、猿が金色の烏帽子をかぶり、幣を手にし山車の上に乗ったり、大弓や大太刀を飾った山車も有名であった。その他、鶏、弁才天、竜神、神功皇后、大鋸、大茶釜、鯨、大斧、大鎌、宝船、牛若丸など数々の飾り山車が氏子の各町を回るのであるから華やかであり賑やかであった。

神田明神かんだみょうじん

現在の千代田区外神田の神田神社である。

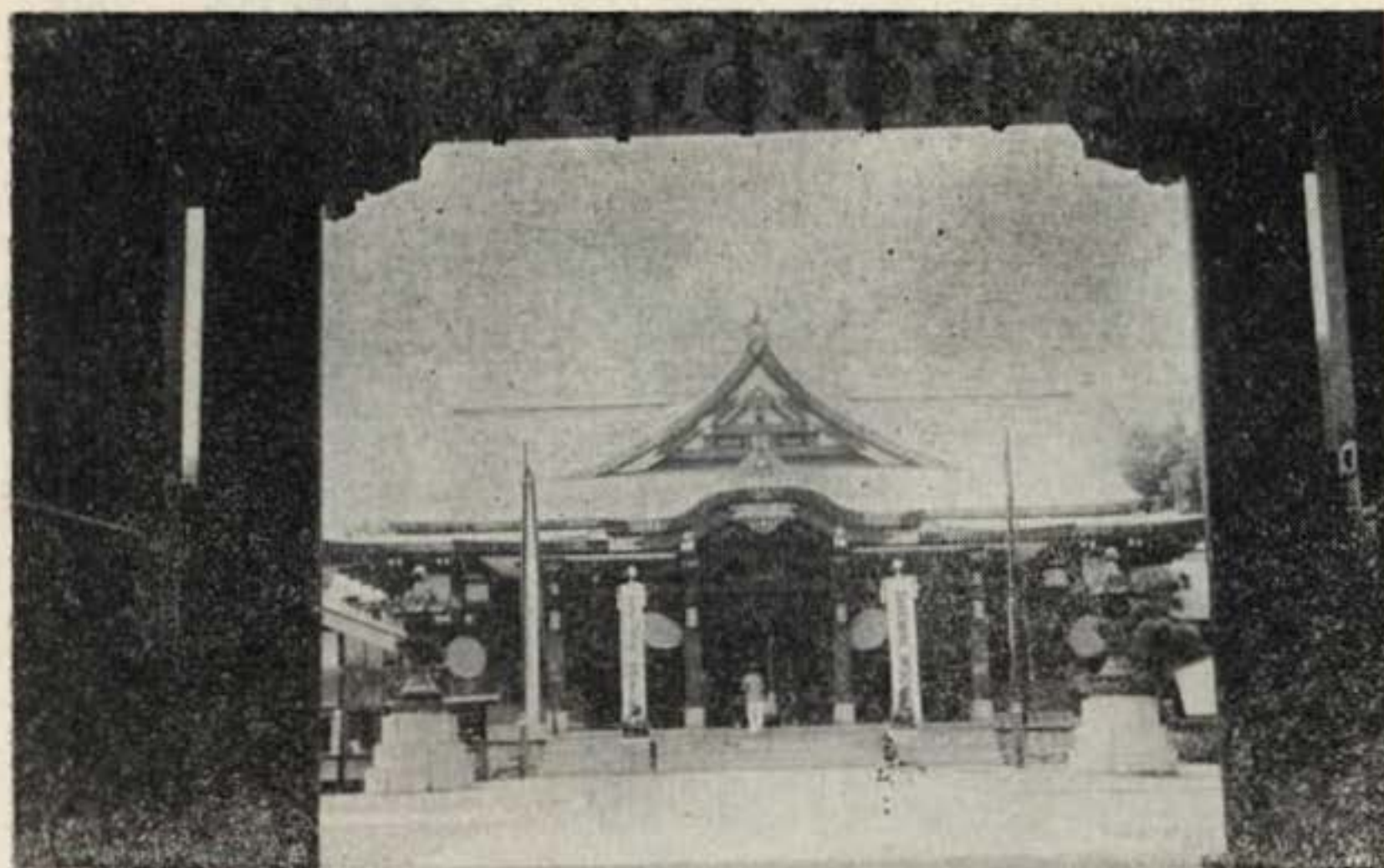
この神社は当初、将門塚のある千代田区大手町に天平二年（七三〇）創建され、漁村の鎮守であったと伝える。承平五年（九三五）平将門が兵をあげ、関東を征し自ら新皇と称したが、依藤太に討たれた。その首は京都に運ばれ

六月十五日
山王祭



——山王祭り<日枝神社>

「江戸名所図会」——



——日枝神社〈山王権現〉本殿——

晒されたが、これを奪い返してその塚に埋めたという。治承四年（一一八〇）源頼朝が伊豆に兵をあげ平家を打討して鎌倉に幕府を開いたが、これは将門の後裔である千葉、北条、畠山、豊島、三浦、土肥、熊谷、梶原などの関東の豪族たちの協力によってなしたものである。以来神田明神は平将門を祀る神社として崇敬されるようになった。徳治二年（一二三〇）遊行上人二代目の真教上人がこの付近に来られたとき、村人たちは疫病、旱魃、洪水に苦しみ将門の祟りであると畏怖されているのを見て、将門に「蓮阿弥陀仏」の法名を諡り、社を復興し将門の霊を供養し、神田明神と名付けこの地の守護神とした。以来その災害がおさまったという。天正十八年（一五九〇）徳川家康が江戸を城下町として神田山を崩し埋立大工事が始まり、神田明神を現在の駿河台に移し、天和二年（一六八二）現在地に移り、江戸総鎮守の神社として百余町の氏子を抱えて繁栄をするようになった。震災の災害を受けたが復興し、昭和五十一年には壮麗な随神門などが完成した。神田明神の祭礼は九月十五日、江戸時代には前日、別当寺院の神田山日輪寺住職が阿弥陀経を読誦するのが習わしであった。祭礼行列が江戸城



——神田祭り<神田明神>

「江戸名所図会」——

内に入ることになったのは元禄元年（一六八八）からであるが天下祭りとしてその威容を誇った。山王権現と同様、諸侯がこれに協力したものである。この祭礼の豪華な光景は当社に保存されている神田明神祭礼絵巻三巻に詳細描かれている。この天下祭りは京都の祇園祭りと大阪の天神祭りとともに日本三大祭りと昔から称せられ、神田明神の祭礼がその中でも随一と称されてきた。その山車の飾りは山王祭りとよく似ているが、つぎのような飾りが人々の目をひいたものである。鶏、猿、翁、竜神、花籠、関羽、牛若丸、二見浦、素盞鳴尊、稲穂に蝶、大国主命、放生会、雉子、武内宿禰、仁田四郎、恵比須と魚などであった。文化のころ飾り出し物に幕府が百兩の補助金を支出したことが記されている。

根津権現 文京区根津一丁目の根津神社である。もと千駄木村の鎮守であったが、この地の徳川綱重の邸宅で生れた家宣が將軍綱吉の継嗣となり、このため世子の産神として崇敬せられ、宝永二年（一七〇五）千駄木村から現在地の家宣旧邸に移し社殿を造営した。五百石の朱印を受けた大社となった。正徳四年（一七一四）家宣死後、子の家継が將軍となり、幕命によって盛大な祭礼を行っ



——神田祭り<神田明神>

「神田明神祭礼絵巻」——



——神田明神随神門——

た。幕命による天下祭りはこの一回だけであつたが、祭りは華麗であつたのでその後も御用祭り、天下祭りと称した。山車の飾りものは、山王権現や神田明神と似ているが、黒い鶏、黒烏帽子の猿などは変つていた。江戸初期の社殿は現在国の重要文化財に指定されている。

三社権現 さんじやこんげん 台東区浅草の

浅草寺東隣りの浅草神社である。浅草寺の秘仏本尊の観世音菩薩像が、推古天皇三十六年(六二八)隅田川において檜前浜成と竹成の兄弟の網にかかり、土師直中知と三人で安置したのが浅草寺の創建であると伝えられている。この三人を祀つたのが三社権現である。三月十七、十八日(現在は五月)の祭礼、獅子舞の神事もあるが、祭りの豪華さは山王権現、神田明神にも劣らぬ

盛大さであった。慶安二年（一六四九）將軍家光によって再建された社殿は重要文化財に指定されている。

深川八幡 江東区富岡の富岡八幡宮である。寛永元年（一六二四）菅原道実の子孫である京都の長盛法印ちようせいほういんが靈夢のお告げにより、道真公作と伝える八幡神像を江戸に安

置することになり、深川の永代島の小祠に白い羽の矢を納めてあることを発見、ここに神像を安置し、幕府に願い出て、付近一帯を埋め立て、寛永四年（一六二七）社殿を創建したのが富岡八幡宮である。靈巖寺史によると靈巖上人が靈巖寺を靈巖島（中央区新川）に創建するに当



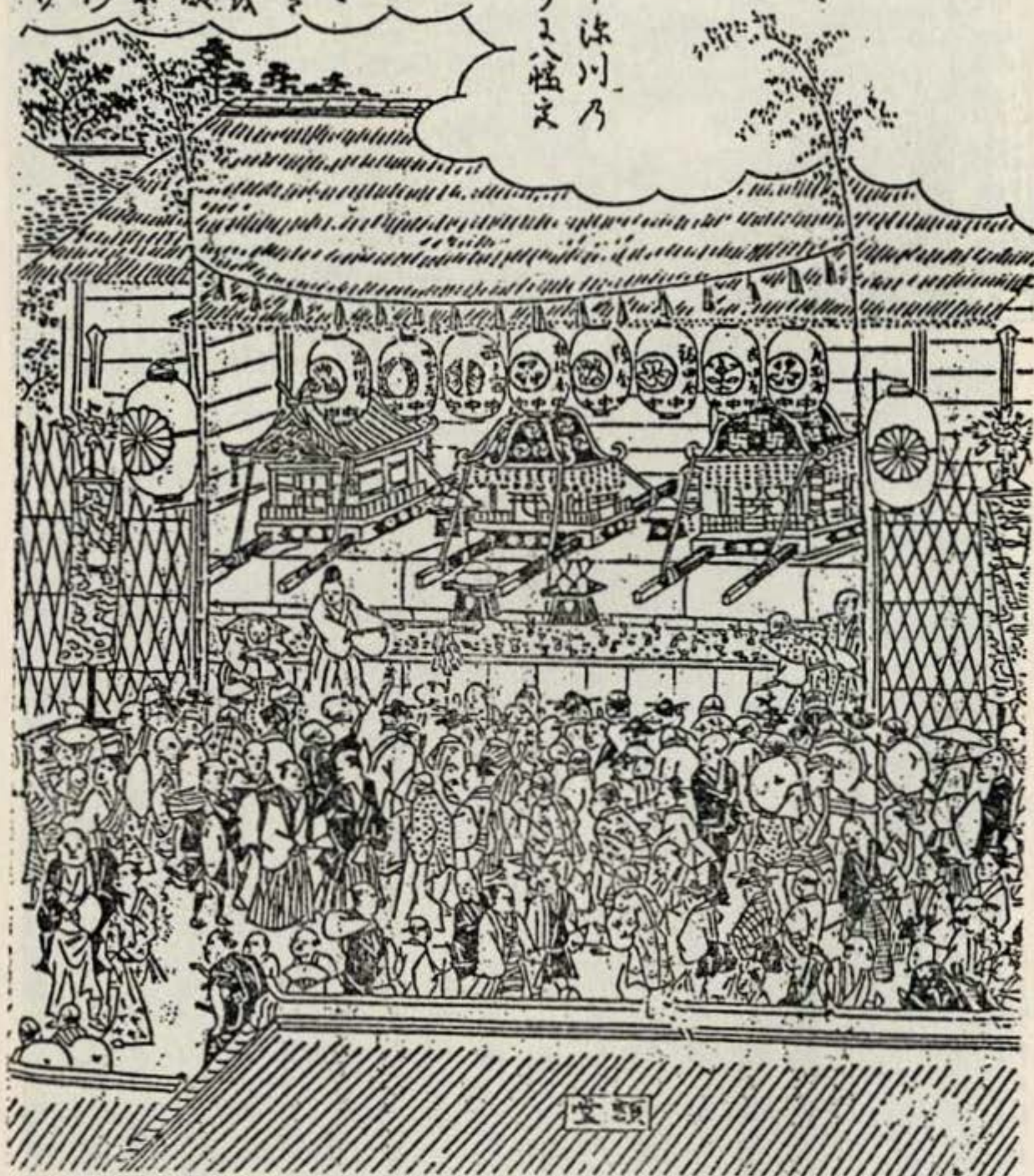
——根津神社の拝殿向拝（国重要文化財）——

り、当山の鎮守として富岡八幡宮を創建せられたとあり、そのため靈巖寺が深川へ移転してからも靈巖島（新川）一帯の町々が八幡宮の氏子となり、現在も八幡宮の神輿渡御が隅田川を渡って中央区の各町を渡御をする。明暦三年（一六五七）の大火後、深川は埋め立てられ市街地となり、深川が繁栄するようになり八幡宮は六万坪の土地を寺領とする江戸第一の広大な大社になったのである。寛永十九年（一六四二）八月十五日、將軍の世子の奉祝祭を幕命によって行い、翌年から神輿渡御が行われるようになり、八幡宮の祭礼は年々盛大になった。この八幡祭りには江戸の市民はこぞって集り、文化四

八月十五日
富賀岡八幡宮
祭禮

視吾堂集

武珠のひんうー深川乃
流を清きわたりふ極定
いられおつゝまん
あのおつのうゝ
永代清くまんう
八すゝの致系持て
くあへるうもへれ
中よ遠く江津比
のきめ、清陽令殿
は、あひひり、
たりをく清まり
ふ船、深のうゝ



——深川八幡祭り神輿

「東都歳時記」——



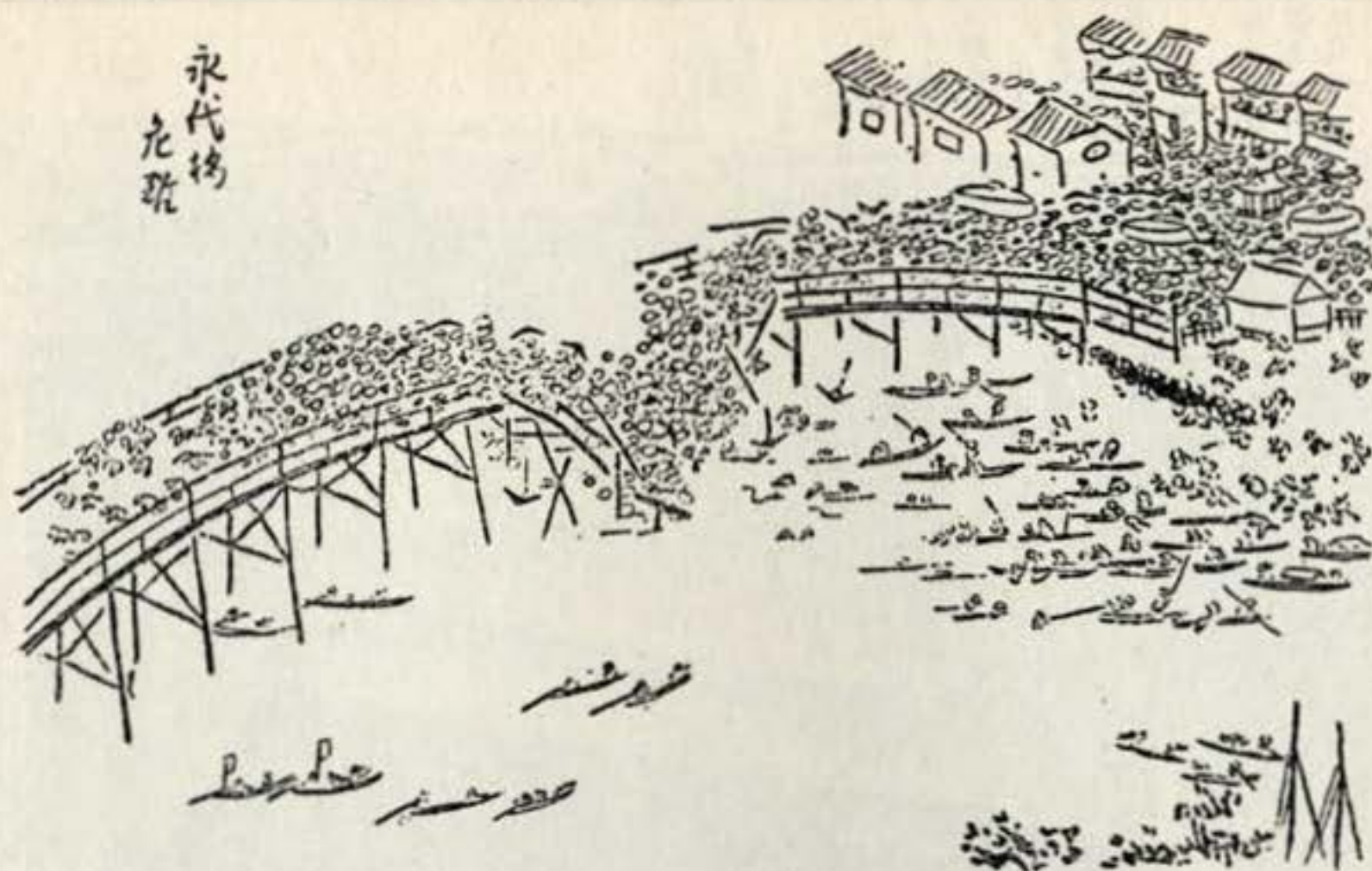
——三社祭り〈浅草神社〉

「東都歳時記」——

年(二八〇七)八月十九日、祭礼にあまり多くの群集が集り、永代橋を押し合いへし合い渡ったので、橋が崩れ落ち二千余人余の人々が溺死した事件があった位、祭りに人々が集ったのである。この八幡祭りには山車や神輿が深川の各町はもとより、中央区の氏子の町まで練り歩くのである。神輿の大きいことと数の多いことで有名であったが、水掛け祭りとして知られている。夏祭りともいい暑いときであるので、神輿や担ぎ手に水を掛け合うのが特色である。この水掛けの風習は、深川の辰巳芸者が災難除けに塩と水を掛けたのが始まりという。そのためこの祭りの渡御の先導を辰巳芸者が着飾って手古舞姿で行列をするのである。さらにその先導を薦が木遣節を唄いながら行列し、華やかを増すのである。江戸時代は町内こそって幟^{のぼり}を立てたので、一名幟祭りともいう。八幡祭りの神輿担ぎが豪華で日本一といわれたのは、深川には木場の材木業があり、佐賀町、新川(中央区)には倉庫業があつて、力自慢の担ぎ手がたくさんいたのである。江戸時代の山車の飾り



——富岡八幡宮<深川八幡>本殿——

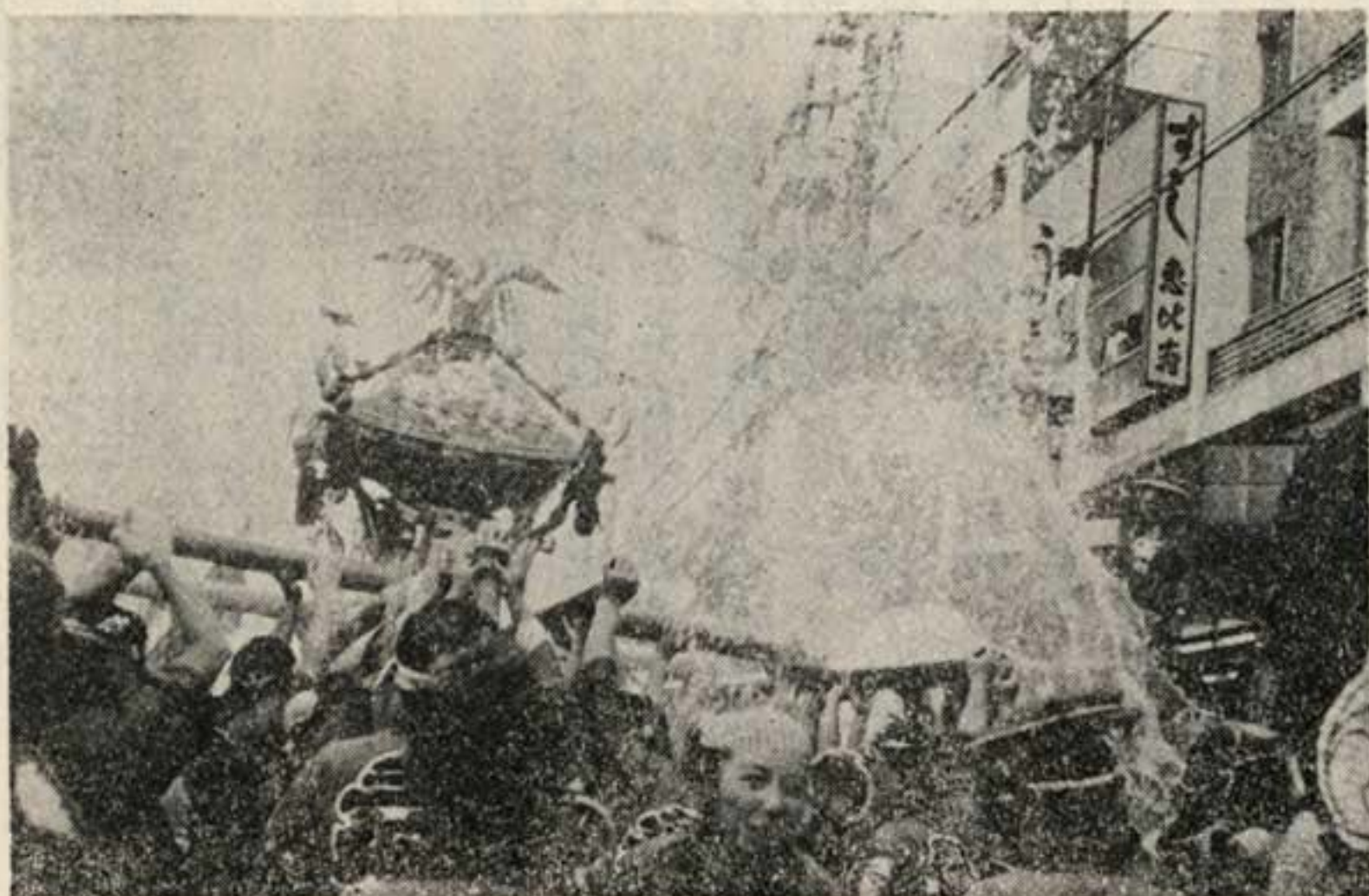


——深川八幡祭り、永代橋崩れ落つ
文化四年「永代橋危難記」——



——神輿を担ぐ外人女性（八幡祭り）——

は、江戸の各社と似たところもあるが、紅葉に秋草、蜃しん気楼きろう、大蛤おおはまぐり、竜宮、大蛸おおたこ、桃太郎、弁慶、奥女中などであつた。現在も八幡祭りには五十二基の神輿、担ぎ手二十万、百万人の見物客が集るのである。



——深川八幡水掛け祭り——

江戸の祭りは武家の町といわれた江戸に開いた男性的にして雄渾華麗な一大絵巻であった。明治以降は全国的な傾向でもあるが、山車が少なくなり神輿が多くなった。昔、女性は神輿に触れることを禁じられていたが、現在は下町には女性の担ぎ手は多くなり、華やかさを増し、外人の担ぎ手まで出るようになり人気を呼んでいる。江戸の祭りは歌舞伎芝居にも取材され、また深川八幡祭りは俳句の秋の季題にもなって知られている。

飾り綱濡らし深川祭り渡御

豊明

(つづく)

付記——表題の三葉葵のカット

三葉葵の家紋は徳川家康が慶長八年(一六〇三)将軍に任ぜられてから家康の家紋となった。以来歴代将軍の家紋となり松平一旅徳川氏の家紋となったが、その形は少しずつ変わっているのである。この家紋は家康の正しい定紋である。

「信」の不足による――

吉^{よし}田^だ 勇之助^{ゆうのすけ}

知ること不可能な「死」について、大学生になった頃から関心と恐怖感を抱きはじめ、今では、とうとう八十台の半ばを越してしまつた。これ乗り越えるための「信」が不充分であつたのを反省している。

わが国では「死」のことを取りあげ話題にするとか、「死」と同じ発音の言葉を好まなしいし、それを不吉としている。

生きている我々に深いかかわりのあるのが「死」である。戦争によるもの、天災によるもの、事故によるもの、自殺、殉死、切腹、追腹、刑死によるもの等、いろいろの「死」が

ある。そして、又、「死」に名誉という文字を添えた言葉が残っている。例えば名誉の戦死といったような……。このような見方、考え方は全くわからない。

「死」は人間にとって最大の悲しみである。

釈尊の第一弟子サーリプッタがなくなられ又、間もなくすぐれた弟子モツガラナも逝かれてしまった時の釈尊の悲しみ、淋しさはたとえよりも深いものであられたようだ。「二人が逝ってしまった後の集会は淋しい限りだ」と申される晩年の仏陀釈尊の様子は深く心をうつ。

その時語られた「自帰依、法帰依」（みずからを洲とし、みずからを依りどころとして、他人を依りどころとしてはならぬ。法を洲とし、法を依りどころとして、他を依りどころとしてはならぬ）の教えこそ仏教の根元であると思っている。

釈尊の静かな死の様子をつたえている大般涅槃經の申にある「この世のことはすべて壞法である。放逸なることなくして精進するがよい」の教えからは実に大きな感動を受ける。

深いご縁によつて現世に生を受けたのであるが、ご縁が尽きたときには、又一切不明な生前へ戻っていくのだと思っている。

しかし、そう思うだけで「死」の恐怖を乗り越えていることにはなっていない。

「死が来るのは生あるもののどもの定め」と導師であられる釈尊の教えは、はっきりしているのに、何故「死」にこだわり、恐れ続けているのだろうか。

釈尊の教えに接し戴くのに、「信」が不充分であつた故である、やっと思ひにいたつた。

「信とは心の澄淨」と、インドの大仏教学者世親菩薩（ヴァスバンドウ）が俱舍論の中に書かれていると承つた。

スッタニパータ¹⁸²（ブツダのことば）の中には、「この世では信仰が人間の最上の富である。徳行に篤いことば安樂をもたらす」とある。

まづ、自然の現法に順応し、はかり知れぬ大いなる知恵に、大生命に、全託する心がまえをかたく保つ。ぐらつく心の引き締めを怠らぬようつとめ、つねに仏を念じているうちに、とらわれている我執や自己のはからいから、次第に越えられよう。

法然上人の「一枚起請文」のお言葉の一部を戴く。

「疑いなく往生するぞと思ひとりて申す外には別の仔細候はず」

海と山の狭間で

—男のロマン(2)—

木^{きの}下^{した}隆^{りゅう}一^{いち}

遠山博士が中国の砂漠を日本の葛で覆い尽くして、治砂のみならず、黄河の治水にも貢献しようとしていているのは、勿論鳥取大学砂漠開発研究所の長年の研究・実験の成果を踏まえてのことであるが、葛が根づいて砂漠の移動を止め、緑の大地が出現するのは、博士の試算でも三十年後である。暴れ黄竜の異名を持つ黄河を鎮めるには、更に長い年月を必要とする。文字通り「百年河清を待つ」ということなのであるが、手を拱いて傍観していたのでは、大地の荒廃は進むばかりである。乃公^{だいこう}出でずんば……、冷静な科学者である博士が、そんな浮わついた気持ちをお持ちのはずはないが、ご高齢ということもあつ

て、ある種の焦燥感を抱いておられるのは想像に難くない。約百キログラムの葛の種子の採取を子供たちに託されたのは、とかく現実的なものに走りがちな現代の子供に、夢を持たせようとお考えになつてのことではないだろうか。「一粒でも結構。それは万倍にもなります。日本人の協力で『暴れ黄竜』大黄河の水を清く美しくする運動は、『日中友好』延いては世界につながると確信します」と趣意書は結んであつた。

大人は恃むに足らずですか、先生。大人だつて……趣意書を一読して、久し振りに私の気分は高揚した。「人生意気に感じては、成否をたれかあげつらふ」、土井晩翠の「星落秋風五丈原」の中の一章句を口にして、微力ながら葛の種子集めにご協力申し上げようと思つたのである。幸い、我が家の周辺にはまだ空地が多く、五分ほど歩けば葛の大群生地があるのを私は知っていた。打ち重なつて地面を覆い、蔓の先端は思い思いに樹木の幹を這い上がつてがんにがらめに縛り上げ、梢から分厚い緞帳のように垂れ下がっているのであつた。あそこしかないな、とそこを採取地に定め、私は早速小雨の中を検分に出かけた。

花はすでに終わつており、小さい青い莢をつけた葛は、満足すべき状態で育っていた。よしよし、これならきつといい種子が取れるぞ——足許から立ちのぼる湿気に多少辟易しながら、松の枝から垂れている蔓を引くと、総身を振るつて多量の露をどつと私に浴びせかけてきた。

その後十一月の半ばまで、葛のことが気になりながら、私は東京を離れることが出来

ず、一度郵便物を取りに戻っただけで、葛の群生地に足を運ぶことはなかった。その間、私は私なりに葛について勉強した。葛（カツ・カチ）という文字を分解すると草冠と曷で、曷は高くあがるの意。それに草冠がつくと、木などにからみついてのび上がって行く野生のツルクサの意で、必ずしもクズだけを表す文字ではなく、ツタ、フジ、アケビ、ブドウ、ウリの類をも含めたツルクサの総称であつたようだ。とすると、孔明の姓である諸葛というのは諸々の葛草の意で、繁榮という意味がこめられた目出たい姓だつたのかと、新たな目を開いてくれもしたが、葛という植物があもりにも身近にあるせい、葛そのものについて核心を突く説明がなされた書物には出会えなかつた。僅かに「原色植物図鑑」保育社刊」が専門図書としての面目を保っているかに見えたが、これとても記述は雑というか曖昧な点が多い。要約すると「葛」まめ科、クズ属。山野特に鉄道の堤に多い大きい多年草で、根は長大で澱粉を蓄える。茎は長く伸びて他物に巻きつき、粗毛がある。葉は下南短圧毛があつて白色を帯び、長さ幅とも十～十五センチ。花は七～九月ごろ総状花序につき、長さは十八～二〇ミリ。果実（莢）は長さ六～八センチ、幅八～九ミリで扁平、褐色の長剛毛がある。「分布」暖帯・温帯。ほぼ日本の全域、朝鮮、満州（南部）、中国。アメリカに帰化」ということなのであるが、根は長大と言われても、どんな形でどのくらい長くて大きいのか分からないし、茎の粗毛、葉裏の短圧毛、果実の長剛毛と言われても、三者の間にどの程度の差異があるのか……。総状花序とはいかなる形態なのか、専門家には周知の事実かもしれないが、素人の読者にはなんとも不明瞭な書き方である。生育場所に

についてもそうだ。「山野特に鉄道の堤に多い」では、読者は鉄道の堤にだけ生えているような錯覚を起こしかねない。かと言って「山野に自生するマメ科の植物で、山路のかげや鉄道の沿線など、いたるところに生い繁っている（山菜歳時記、柳原敏雄『婦人画報刊』）」「全国あちこちの日当りのよい土地に生えているが、中小河川の堤には目立って多い（薬草健康法、井波一雄『毎日新聞社刊』）」「日本だけでなく、アメリカにも進出した雑草で、つる性の多年草。道路脇、空地、荒地、荒れた林内などに生える（野外ハンドブック1・山菜Ⅱ山と溪谷社刊）」等の記述を総合すれば、ある程度葛の正体は掴めるが、間違った記述もある。葛は日の当たるところでなければ生きて行けない植物で、「荒れた林内など」には絶対生えないことを、「野外ハンドブック」の筆者はご存知なかったようだ。

「アメリカに帰化」「アメリカに進出」の真相も、「自然界の密航者Ⅱ朝日新聞社刊」を読むまでは、全く分からなかった。葛は一八七六年、建国百年を記念したフィラデルフィア万博に、日本から園芸植物として出展されたが、以来各地で栽培され、更に一九三〇年代のニューディール政策の一環として始められたテネシー溪谷の開発では、切り出した土砂止めに一役買っているのである。生長が早く、深く根を張るために、アメリカ政府の土壌保全局も大々的に植えつけを奨励したという。気候が生育に適していたのか、葛はアメリカに定着し、はびこり過ぎていまではすっかり嫌われ者になっているというから皮肉である。

十一月の半ば、葛の群生地を訪ねて、私は愕然とした。辺り一面きれいに切り払われ

て、すでに整地も終わり、大きな建物が建つらしく、建築用の資材が山積みされていた。私のささやかな夢は潰え、遠山博士のロマンに協力するのは殆ど不可能になってしまった。しかし、いたずらに嘆いていても始まらないので、帰る道々、路傍の貧相な蔓についているいじけた莢を摘んで来たが。莢の中に種子が入っているかどうか甚だ心許なかった。それでも小一時間で、スーパーのビニール製の買物袋にぎゅうぎゅう詰めにしなればならないほどの収穫はあったが、直射日光に当てた方がよいのか、陰干しにした方がよいのか、乾燥の仕方の見当がつかないままに、そのまま地下室に吊しておいた。暮れも押し詰まって、急に思い立って種子の採取に取りかかったが、莢はしんなりしていて、摘み取った時とあまり変わっていなかった。地下室の空気はひんやりしているので、自然に低温保存したのと同じ結果になったようで、微が生えたり腐ったりしていなかったのはめっけ物だった。

莢の皮は意外に強靱で、乾燥の度合が進んでいなかったせいもあるが、両手で揉んだぐらいでは口を開いてくれない。たまに芥子粒ほどの黒い粒が落ちたりするが、とても葛の種子とは思えない。本当に葛の種子であろうか。多少の疑問は残るが、一つ一つ確かめて行くしかない。鋏で切り開くことを思いついてからは作業は捗ったが、莢の三分の二は黒い粒も入っていない。時々胡麻粒ぐらいの大きさのものが出てくると、単純に喜んでしまった。文房具の鋏を一つなまくらにして、半日かけて辛気な作業は終わったが、収穫は微々たるものであった。胡麻粒状のものは天眼鏡で見ると腎臓型をしていて、葛が豆科である

ことを証明しているが、芥子粒状の方は只の粒で、豆の片鱗すら見られなかった。未熟児と勝手に断定してこれを捨ててしまおうと、残ったものはぐい飲み一杯にも満たなかった。果たしてこれが完全に成熟した葛の種子だろうか、乾燥が進むにつれて、皺が寄ってしまふくれてしまふのでは……。小瓶に入れて机に置き、日々そんなことを思い、お送りしようかどうかと逡巡しているうちに、去年は暮れた。

今年四月のある日、目標の数量をはるかに超えた葛の種子を携えて、遠山博士は元気に蘭州へ発たれたという小さな記事が朝日新聞に載った。それを読んで、私は内心忸怩たるものがあつた。逡巡に逡巡を重ねて、とうとう「一粒でも結構」という遠山博士の要請に報いることが出来なかった優柔不断を恥じたのであつた、それにしても百キログラムを越す種子が集まったとは……。まことに今回のことに何十万人の子供が協力したか知らないが、子供に敬意を表すると共に、いまの子供も満更捨てたものではないなと意を強くして嬉しかった。

蘭州から栽培の成否についてはまだ報告はない。もし今年駄目だったとしても、来年がある……。私は葉陰に青い莢をつけ始めた葛を眺めて、今年も種子の収穫をしななければ、と思っている昨今である。

昭和63年度版

浄土宝暦

発売開始!!

ふるってのお申込みを!!

法然上人鑽仰会が責任をもって編集している「浄土宝暦」。
年末年始の好便な檀信徒用施本として、広くおすすめいた
します。

B 6 判 総ページ数 40ページ

一部単価 65円 (200ブ以上 特価60円)

送料実費 (300ブ以上はサービスします)

.....お申込み.....

〒 102 東京都千代田区飯田橋 1—11—6

法 然 上 人 鑽 仰 会

(振替) 東京 8—8 2 1 8 7

妙なもので、磔刑架へ縛りつけられているときはげんなりとして瀕死の状態だった明崇儼、執行に手間どるのを見てとると、俄かに活気づいてきた。

「みんな、よく聞けよ。わしをただの泥棒風情だと思ったら大間違いだぞ」

大音を発して群衆に呼びかけはじめた。

群衆のなかからこれに応じて冷やかしの叫びがおこる。

「そのとおり。たいした色男だ」

「色男だと……それもある。じゃがそれ以上にわしは何でも透視できる霊術を身につけた道士なんだぞ」

「何でも透視できるんなら、お前さんはそんなところで死ななくてもよさそうなもんだ」

別な声が茶々を入れた。

「誰が死ぬものか。わしは死なぬぞ」

「何を言ってるんだ。じきに首斬り人が登ってきて、お前の首は胴体と離ればなれになっ
てしまうんだ」

「お前らの眼には、そう見えるじやろう。じやがな、わしの眼にも自分の首がすっ飛ぶところかはっきりうつるんだ」

「自分の首がすっ飛ぶところだって！ そういうお前さんはどこで見ているんだよう」

群衆中の対話者は、いささか気味が悪くなつたらしく発する声が力弱くなった。

「尸解(しかい)と言うてな。ここで斬られるわしは仮りの姿よ。ほんとのわしは、わしの魂はすでに身体から抜け出して、お前らの間をさまよっているのよ」

實際寺の若い書生には死刑囚が強弁する意味がわからないらしく、王徐明に説明を求めてきた。

すでにその道を学んできたので、丁寧に説明してやった。

道士たちは不死の永生者(仙人)となるために、あらかじめ身心を鍛えておかねばならない。

まず身体を鍛えあげてことを「形を養う」

——養形と呼ぶ。食餌法や呼吸術で体質の転換をはかる。これと併行して精神の鍛練をする。「神(こころ)を養う」——養神である。人間の精神を、神々の精霊や靈気のなかへ没入させるのである。

この養形と養神とが完成すると、仙人となつて不死の境地へはいることができる。肉体が死滅しても精神は分離して単独で生き永らえる。

いま明崇儼が豪語する首を刎ねられても自分の魂は群衆に立ち混じつてそれを見物している、というのがそれである。

首斬り役人が二人、処刑台上へ現れた。一方が大刀をひっさげ、残りは検分役である。

明崇儼はいちだんと声をはりあげ、早口でしゃべりだした。

「わしをこんなところへ送りこんだのは、その姪乱な女のせいだ。天后だか何だか知らないが、年齢も忘れて男と見れば骨までしゃぶ

りつくさずにはおかぬ女だ」

明らかに則天武后の悪業を罵りはじめたのである。処刑にかかろうとした役人たちは、大刀を置くときと坐りこみ、厭勝師の言葉に耳を傾けてしまった。

「わしはな、あの女にひとところ可愛られ、とんとん拍子に出世して朝散大夫にまでなったもんだ。ところがどうだ。あの女は若い方士に乗り換えた。夜ごと日ごと、若い男を抱いて色狂いじゃ。そして、わしを追っ払ったばかりか、いわれもない濡れ衣を着せて、こんなところへ追いあげた。強盗だと吐かしおつてな」

もはや誰も合の手を入れなくなった。うっかりこんな話題に同調していったら、おのれの首が危うくなる。相手は唐王政を牛耳っている強大な女性権力者だからである。

掠の枝上で王徐明は首をすくめたくなくなった。厭勝師が呪咀の言葉を投げつけている相手こそ、この自分ではないか。

それにしても則天武后はかつての情夫明崇儼を抹殺するにあたり、彼を名もなき強盗として処刑する手段を考案したのである。これだと朝散大夫の処刑という政治問間に発展しないで済むであろう。また武后自身も私事もあばかれない。この悪どいやり口は、いずれわが身にも及ぶであろう、と王徐明は眼下の死刑囚が、明日は自分にとってかわる姿を思いえがいて慄然となった。

明崇儼は恐れげもなく則天武后の情事を、微に入り細をうがって描写しまくる。まるで武后の下半身が丸裸にむかれて群衆の面前で踊り狂っている感じだった。群衆は好色を眼をぎらつかせて聞き入る。大刀を握った首斬り役人までが同じ顔つきである。

これは、いったい何事であろうか。
あとになって少年憚良が教えてくれたのだがこの首斬り役人、兩人とも皇太子李賢の腹臣であった。武后の手口を見抜いて、その情夫たる道士に語るだけ語らせ後日の言質とし

て聴取しておくつもりだったという。このおびただしい群衆が証人となる。

「それだけか。もう言うことはないか」

道士の口が閉ざされたのを見すまして検分の役人が念を押した。

「未だいくらでもあるが、忘れたわい。あんまり馬鹿らしいことなんでな」

「最後に、みんな向って叫べよ」

「なんて叫ぶんだ」

「天后こそは悪党中の悪党。この国を滅ぼす牝猫だ、とな」

「言ったらこの縄をほどいてくれるか」

「やらんでもないぞ」

役人はかなり大胆な約束をした。

明崇儼はそっくり同じ言葉を叫び声にのせて群衆にぶちまけた。みんな真剣な表情になった。しかし、重い沈黙で聞き入る。かすかにうなずく者はいたが、誰も声は発しない。共感の叫びをあげることとはためられるのであろう。

「よろしい。よくやった。縄をほどいてやれ」

検分の男は首斬り役人に命じた。大刀を握り直すと、道士の胸を締めつけた縄目へあてたと思った次の瞬間、白刃はひらめいて下顎のあたりへハネあがった。

「な、なにお……」

声はそこで絶えた。刃が深々と頸の肉へ喰ってしまったのだ。鮮血が流出しはじめた。

「処刑ですね」

首斬り役人は上司に訊いた。

「そうだ、もう用はない」

大刀を振りかぶると、うなだれた道士の首筋めがけてうちおろした。皮一枚でつながっていたのであろう。明崇儼の首はマリのよう

に転げ落ちた。

立派に処刑は終わったわけであるが、その過程は「刑罰」とはおよそかけ離れた内容であった。

「ずいぶん悪あがきをしたもんですね」

棕の葉越しに向うの太枝から書生が声をかけてくる。

「うむ……往生ぎわの悪い男だった」

と答えてはみたが、およそ実感にはそぐわない言葉だったことを、王徐明はわかりすぎるほど承知していた。

十四

明崇儼の死について「資治通鑑」は以下のように紛飾記事を載せている。

——偃（えん）師の人、明崇儼。符呪幻術を以て上（高宗）及び天后の重んずるところとなる。官、正諫（朝散か）大夫に至る。五月壬午、崇儼、盗の殺すところとなる。賊を求むれどもついに得ず。崇儼に侍中を贈る。

盗賊に殺された、と公表する。その盗賊は

ついに捕縛できなかつた、ともいう。闇から闇へ葬ってしまった事実をこの記載は語っている。

たしかに処刑された強盗が厭勝師だったという裏付けはない。いかに彼自身がわめこうともそれは問題にならない。死に臨んでどんなホラを吹きまくるか。いわんや強盗の類いは自己顕示慾のつよい連中だ。

こうしたスリ替え処刑は、暗黒政治の常套手段だった。強盗に殺された、と公表し、じつはその強盗に仕立てて合法的に処刑してしまふのである。

しかも則天武后は明崇儼暗殺の罪を皇太子李賢になすりつけてしまった。「資治通鑑」を追跡してみる。

——崇儼が死するに及び、賊、得られず。天后、太子の為すところと疑う。太子すこぶる声職を好み、戸奴趙道生らと狎昵（こうじつ）し、多くこれに金帛を賜う。司議郎韋承

慶、上書して諫すれども聴かず。天后、人をしてその事を告げしむ。薛元超、裴炎に詔して、御史大夫高智周らとともに、これを襍鞠（ざつぎく）せしむ。東宮の馬坊において、さぐりて皂甲数百銭を得、以て反具と為す。道生また疑稱す。「太子、道生をして崇儼を殺さしむ」と。上、もとより太子を愛し、遅回してこれを宥（ゆる）さんと欲す。天后曰く「人の子となり逆謀をいだくは、天地の容れざるところなり。大義、親を滅す、何ぞ赦すべけんや」と。甲子、太子賢を廃して庶人となす。右衛門中郎將令狐智通らを遣わし、賢を送りて京師に至らしめ別所に逃す。党与、みな誅に伏す。

則天武后は二つの道筋から皇太子李賢を追いかんていった。

李賢が奴隸の趙道生と親しくしている事実を眼をつけ「自分が明崇儼を殺しました」と告白させた。だが「賊を求むれども、ついに

得ず」だから、この奴隷をどこかへ逃亡させたことは明らかである。

さらに乗馬を好んだ李賢の馬坊を探索させ、そこに三百人分の武具が隠匿されていることを発見した。「以て反具と為す」——反乱の武器とめきつけ、李賢を逮捕、庶人に降等したうえ幽閉したのだった。

じつはこの反乱、皇太子側もすんでのところで則天武后を除去するチャンスを持ったようである。だが、奸智策謀にかけては武后の敵ではなかった。永年にわたり、それひとすじで宮廷内を牛耳ってきた女性だったからである。

その朝、善導はよほど体調、気分が良かったのであろう。終南山へゆこうと言いだした。久しぶりに悟真寺へ籠もりたいという。夏の気配が長安の街をおおい、特有の蒸し暑さがやってきた。王徐明はお供することになった。

晴れた日で、善導の足取りは軽かった。足

だけではなく、言葉も淀みなく流れ出た。

「私の往生礼讃という偈文をよんだことがありますか」

「和上の御作ですか」

「そうです。聞いてもらいましょうか」

朗々と抑揚を付して吟じはじめた。

人間窓々として衆務を営みて

年命の日夜に去ることを覚らず

灯の風の中に滅せんこと期し難きが

如し

忙々たる六道、定趣なし

いまだに解脱して苦海を出ることを

得ず

云何安然として驚懼せざる

おのおの聞け強健にして力あるとき

自策自励して常住を求めよ

「真意をお聞かせ下さい」

「読んだ字義どおりです。私ども人間は、生

「ひとすじの細い道をきびしく駆け抜けてきたからですよ。左右からの、また背後から呼び止める声にも耳を傾けないで」

王徐明の決断を讀える口調になった。二河を貫通する狭隘な白道を走りとおして、仏の慈悲にめぐり遇えた喜びを、ともどもにわかち合いたい心境だったにちがいない。

しかも善導はその喜びを、いま踏みしめる神和原の大地の感触で味わい直しているようでもあった。王徐明は、心の師がこの大地に限りない愛着をいだいていた事実を、終生忘れないであろう。

善導は言った。

「浄土を願生する者は、大地で眠りたい」

「大地で眠るとは、どういうことでしょうか」

「山峡ではない。陋巷でもない。広々とした大地だ」

「なぜ大地なのですか」

「大地は種を実らせませす。やがて芽をふき出

させませす。幹となって枝を伸ばし、葉を繁らせるのです」

「どんな幹や枝葉なのですか」

「念仏の樹です」

「念仏の樹……」

「観無量寿經に宝樹觀が説かれています。極楽浄土に立ち並ぶ宝樹は、その一本一本が見事な光沢と輝きを持っています。個性的で枝に実らせた果実もそれぞれが異なった味覚のものです。しかし、ずらり並んだ宝樹の並木は整然としており、まさしく一糸も乱れない景觀を呈しているのです」

「一本一本は異なった色や形でありながら並木になると一糸乱れずですか」

「それが念仏です。各人の念仏は異なっているても大衆が同唱するとき、それは一つの声になるということです。私はこの神和原の大地に化して、死したあとも浄土へ至る念仏の功德を、宝樹となって永遠に説き続けたいのです」

思いつきだったが、俄かに当面の生きかたへ鮮明な進路が見えてきた思いになった。

そうだ。ここに一寺を建立しよう。いつの日にか遷化なさるであろう善導和上をお迎えするため。

一望の草庵にきらびやかな伽藍や雁塔が幻影となって浮上してきた。王徐明に残された人生を燃焼し尽すにふさわしい「仕事」ではないか。

だが、その仕事へとりかかるまえに眼前に立つ青い眼の酷吏をどうさばいたらよいのであろう。

酷吏——則天武后が近ごろ手もとで造成しはじめた官吏職制にはない腹臣グループの呼称であった。現在で言う秘密警察の類いである。

一般には酷薄残忍な官吏の総称だが、武周政治にあっては次第に個性的な存在としてのその地位を強固にしはじめる。

酷吏要員には、外征で囚虜となった夷狄の

勇者たちが多かった。つまり唐軍との戦闘にやぶれ捕虜として都へ送りこまれた連中だ。

ほんらいなら処刑される運命なのだが、則天武后は彼らのなかで若い武人たちを再活用した。

死一等を減ぜられ、大奥で豊かな暮しを許されたのである。武后のためなら水火へ飛びこむことも辞さない気持になるのは当然である。

そんな酷吏の頂点に立った男として索元礼を「旧唐書」は挙げている。彼もトルコ系の武将で則天武后の手足となって働いた。「性残忍、甚しきこと狼虎にまさる」（「旧唐書」）と恐れられた殺人鬼である。

さすがの武后も眼に余り、密勅を下してこの索元礼を処刑してしまうが（天授二年二月）、それまでにどれだけの宮廷人が彼の暗殺剣によって斃されたことか。

いま王徐明の眼前に立つ男、遊撃將軍とも呼ばれた索元礼ほどの大物ではない。顔も名

も知らない刺客であった。

「喜導和上は、いまどこにいるのですか」

青い眼の刺客は、いきなり訊いてきた。

「和上と何の関係が……」

「あのままお山の寺にこもったままですか」

終南山の山なみを顎で示す。

刺客は長安の實際寺から悟真寺へと、たえず王徐明たちを尾行していたにちがいない。

「和上は病んでいらっしゃるのです」

「この前、此処へきたときは、たいへん元気だったが」

あの日も刺客は神和原のどこかにひそんでいたであろう。それにしても執拗に自分をつけねらう目的は何であるのか。

「きみは天后の命令で私を殺しにきたのですよう」

「……」

刺客はことりと表情を動かさない。

「殺すのは勝手だ。しかし善導和上には何の関係もない。だいいち、そのお方は宮廷人で

はない。わたしは天后に仕えた者だ。天后の御命令とあれば、殺されてもやむを得ない」

「善導和上は幾歳かね」

刺客は訊いた。

「やがて七十の声を聞くでしょう」

「七十近くにもなって、しかも病んでいる。

じきに死ぬ身ではないか。わたしの手にかかったとしても同じことだろう」

自分にやらせてもらえば、その分だけ功績

点があがる、と言わんばかりである。

「どこの誰方が存じませんが、それはちがいます。人間の生命というものは最後まで大自
然の意志に従ってゆかねばなりません。わた
しどもはその大自然の意志を仏のお心と信じ
ています。だから自分の生命は、自分のもの
ではない。生きるのではなく、生きることが
許されているのです。おのれに対して、そう
考えることは同時に他に対しては、絶対に殺
さない」ということになるのです。自他とも
に不殺です。生きる余命が短かいからと言っ

て、大自然の理にそむいて殺すことは許しがたい行為になります」

「その理だと貴郎を殺すことも悪になるわけだな」

「もちろん悪になります。しかし……」

「しかし、何だ」

「わたしも宮廷に仕えた身です。命令とは言え、ひとを殺した経験がございます」

「ほほう、虫も殺さんような顔をしておいで」

「女性たちでした。後宮の……」

「女かい」

刺客は軽蔑したように王徐明を見る。

「そうです。先帝に仕えた愛妃やその侍婢たち。命令とあれば手をかけねばなりません」

「たとえ命令でもわしは女だけは殺さんぞ」

妙に力んでいる。どうやら刺客が育った西域の武人社会にはそんな掟があったようだ。

「女はともかくとして……いま、あなたも命令でわたしを殺しにきた。わたしも同じ宮廷

に仕えた身なのだから、殺されてもやむを得ない、と諦らめているのですよ」

「では、わしがこれからやることを許してくれるというわけだな」

「許すも許さないもありません。殺すあなたも主命だし、殺されるわたしも主命に従っているだけです」

「済まん」

刺客は青衣のふところへ右手をさし入れた。そこに短剣が隠されているのであろう。

王徐明はそのまま草上へ坐り込んだ。ゆっくりと合唱し、念仏を唱えはじめた。

「草刈りが半分まだ残っておる」

短剣をいったん振りかざして刺客は言った。王徐明が坐る神和原の台地。草むらが半分ほど刈り残っていたのである。

(つづく)

◎読者の皆様へのお願ひ

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字詰用紙六〜九枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十三巻 十一月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和六十二年十月二十五日 印刷

昭和六十二年十一月一日 発行

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷所 長谷川印刷

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒103 振替東京八一八二一八七番

待望の新刊

『浄土』誌連載の珠玉の回想記

父と母、そしてふるさとへのはるかな想いをやさしく綴る

『み仏とともに』

——父母に捧ぐ浮生の記——

大正大学学長

安居香山著

B6判 二〇〇頁

定価 一八〇〇円 ㊦二二〇〇円

△発行△ 山喜房仏書林

㊦130 東京都文京区本郷五―二八―四

(振替)東京 〇―一九〇〇

第五十三巻 十一月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和六十二年十月二十五日印刷 昭和六十二年十一月一日発行